

狩野亨吉

夏目君と私



夏目君と私（談）



夏目君と私と相識あいしったのは、夏目君が松山へ赴任される少し以前で、山川信次郎君を介してであった。それから、ずっと交際を続けて、熊本高等学校時代にも一緒に、英国留学から帰って来られて一高へ出られた時と一緒に、又大学を止められて、朝日新聞社へ入り、明治四十年の春、京都へ来られた時には、しばらく私の家に滞在しておられるなど、非常に親しくしておった。併しかし、かように親しくしておったが、反かえって、余り親

し過ぎたせいか、少し考え違いされていたことがあった。それは、私を全然、文学などというものには門外漢で、小説などというものは少しも解さないものと思つて、「君は、小説などはわからないだろうから、僕が著書などを出しても、進呈しないよ」と云つて、後いろいろな著書などを出しても、一冊もくれないという風であつた。これは誤解で、実は当時、しきりに文学亡国論等が唱えられて、私もその論を奉ずるもののように誤り伝えられたためであつた。当時は、文学亡国論以外に、学生の長いマントを着るのを見てマント亡国論、明るいうランプを点ず

るのを非難してランプ亡国論という風に、いろいろ亡国論が流行していたために一寸した風説もそれが亡国論に關したことであれば忽ち真実の如く伝えられ、私も文学亡国論を唱えたように誤解されたためであつた。私は、何も文学亡国論などは少しも唱えなかつたのである。

実は、私は少年時代から相当小説、文学というものに興味を持ち、大学予備門時代には盛んに、ゲーテやルソオのものを原書で読んでいたものである。尤も日本の小説は殆んど読まなかつた。之は家庭が嚴格で、小説なんか読むと父にしかられるためもあつて、読まなかつたが、

原書だと何を読んでいるのか、父にもわからないため、盛んに原書で外国の小説を読んだものである。ところが後、スペンサーのものを読んで、非常に感じ、それ以来、科学を好むようになり、小説は読まなくなり、大学も理科へ入って数学を専攻するようになった。そんな風の關係が、誤り伝えられて、文学亡国論を唱えるもののように考えられたのであった。

夏目君の、この文学を好まないものには、その著書を与えないということとは、何も私に限ったことではなく、元の満鉄総裁の中村是公氏も、非常に夏目君とは親しか



ったが、殆んど、夏目君の小説を読まず、又無論その著書も進呈されなかつたということだが、私も夏目君とは非常に親しかつたが、文学というようなことに關しては、中村氏と同じようだと考えられていたと思うのである。

『漱石全集』（昭和二年版）月報第五号（昭和三年七月）



日本文学電子図書館

---

夏目君と私(談)

著 者：狩野亨吉

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館